

## 風景デザインレター from 九州(第 31 号)

生物多様性の保全、地域特有の風景の保全、限界集落問題の解決策、……。これらの異なる問題は、実は、一つの問題提起から派生している。それは、田舎のおばあちゃんたちに代々伝わって来た「煮物」がなくなっていくことに起因しているのだ。横浜で、まずい飯を食いながら、つくづくそう思った。

須藤功「写真で見る日本生活図引 すまう」を眺めつつ一杯やりながら

### 【結局、やっている方向は？】

公共デザインについて考えるということで、コンサルタントの市場展開を考えて活動していた「風景デザイン研究会」で、文化的景観というテーマが表に出てきた。棚田や漁港の風景を守るためには、そこでの生業をいかに継続するか、あるいは、生業の継続が困難であれば、その代わりの風景を守るための人手をどう確保するか、NPO でいくのか、あるいは国土保全としての公共事業で行くのかという議論が出てくる。

限界集落と言われた過疎地域をいかに活性化させるのか、それには、都市と地方が連携した仕組み作りが必要だと考え、自分たち建設技術者がやれることはないかと考え、発足させた「九州郷づくり共助ネットワーク研究会（共助研）」で、新しい産業を興すということで活性化を図るのでなく、今住んでいる人々、現に生活している人々の現在をより快適に、かつ誇りを持って生活してもらうための仕組みとして、どのような形態が可能かという議論が出てくる。

名古屋の COP10 を受け、生物多様性戦略を構築するため、勉強会を開催することとしたが、開発により影響を受ける環境より、人間活動の縮小がもたらす環境への影響をどうするかが問題だと指摘を受け、それは、中山間地域の耕作放棄地であったり、林業が成立せず荒廃した森林であったりと、そのために、林業をどう再生するか、あるいは中山間地域の、あるいは郊外の里山をいかに人間の手をか

けることを復元するか。

公共デザイン、過疎問題、生物多様性と切り口は違うのだが、どれもこれも同じ問題。これまで生活や社会活動を通して守り続けてきた地域が、荒廃することで、失われていくものがいかに大きなものであるのか。世の中一見便利で豊かになったような気がするものの、その一方で、メダカやカタツムリが絶滅危惧種になるのと同じように、失われつつある日本人の文化的なさまざまな価値。便利さが持つ魅力の幻想にだまされ、そこに潜む危険さに意識を向けず、次々に忘れ去られていく日本の価値。かつて紹介した宮本常一の「忘れ去られた日本人」のように、現在、大きな価値の損失が事件として起きている。

それに気づくべきだとのメッセージが、デザイン、地域振興、生態系のどれを議論しても、行きつくところが中山間地域の生業の在り方ということだという指摘に他ならないと考えざるを得ないのである。

先日、横浜のホテルに宿をとり、駅前のチェーン店の居酒屋で、うまくもない酒と塩辛すぎる焼き魚を 3,000 円の大枚を払って食事をとり、コンビニでカップめんを買い、ホテルでお湯を沸かし食べる。確かに便利だ。でもそれ以上の何があるのか。先日来、中山間地域支援に行っている大野川の長谷地区で、長谷レディースと呼ばれる平均 80 歳のお嬢さん方が作った煮物や、そばの川でとれ



た手のひらほどある茹でたモクズガニ、その甲羅になみなみ注いだ地酒。心の奥底から「あああ、しあわせやなあああ！！」と、気持ちよく酔っ払うひと時がもたらす価値の大きさと比較すると、都会の便利さにどれほどの価値があるのか。働きざかりの若者たちは、都会に集まり、切磋琢磨して自分を磨き、家族のため、自分のため一生懸命に働き、かつ、社会に貢献する。酒も、味わう酒でなく酔える酒である必要があり、つまり、質より量である。その世界は、便利という環境に支えられてこそ効果的にありえる。一方で、50 を過ぎ、少々、人生わき目も振らずに頑張るということに疲れてくると、少し世の中に存在するいいものが見分けられるようになり、便利という幻想に惑わされることも少なくなり、手間暇をかけて、また、より多くの労力がかかったであろう納得する物を手に入れる。

いろいろなことをやってきたつもりが、なぜか、ある一つのベクトルの方向に向きつつあり、その方向の指し示しているものが、「消え去りつつある田舎の文化や生活を、何らかの形で残してくれええ！！」という声のような気がする。「メダカを保全するためには、田舎のおばあちゃんたちに代々伝わって来たいろんなことを残さなければいけない」と。 【続く】